

〔古今和歌六帖天一〕ゆふだち

夏の日のはかにくもる夕立のおもひもかけぬ世にもあるかな

〔源氏物語紅葉賀七〕ゆふだちしてなごり涼しき宵のまぎれに、うんめいでんのわたりをた、すみ

ありきたまへば、此内侍びはをいとをかしうひきゐたり、略○中ひきやみていといたくおもひみ

だれたるけはひなり、君あづまやを忍びやかにうたひて、より居給へるに、おしひらいてきませ

とうちそへたるも、例にたがひたるこ、ちぞする、

立ぬる、人しもあらじあづまやにうたてもかゝる雨そ、ぎかな、とうちなげくを我ひとり

しもき、おふまじけれど、うとましや何事をかくまではと覺ゆ、

〔吾妻鏡五十二〕文永二年六月三日己巳、日中夕立、

〔新撰字鏡雨〕霰亡各反、膝也志、雹同波角反、深也志、雹久禮、又三會禮、雹久禮、又阿良禮、

〔倭名類聚抄一〕霰雨、孫愔曰、霰雨小雨也、音與終同、漢語

〔箋注倭名類聚抄風一〕按、志、水垂下之義、久禮、謂或雨或陰、天氣暗晦也、略○中、按、之久禮、謂暮秋初冬

之際、且降且霽之、雨漢語抄以訓小雨之霰爲之久禮、非是、李時珍曰、立冬後十日爲入液、至小雪爲

出液、得雨謂之液雨、所謂之具禮近之、

〔類聚名義抄七〕霰音終、シ、

〔下學集天地一〕時雨、シケレ、霰シケレ、

〔日本釋名天上象〕時雨、まばしくらき也、らとれと通ず、時雨ふる間はまばしくらし、

〔倭訓栞前編十一〕まぐれ、天陰りて小雨するをいふ、頻昏の義、歌にまぐれのあめといふは、本義

なるべし、新撰字鏡に霰又雹をよみ、童蒙頌韻に霰をよみ、倭名抄に霰雨をよめり、常に時雨をよ

めれど、霰雨は小雨也といひ、時雨は漢晉春秋に、喜如時雨と見え、好雨如時節の意なれば、あたら

時雨